

佐渡にユキワリソウの千重咲きがおすすめですか？

伊藤 邦男

平成元年（1989）2月8日。この2月8日は旧暦の元旦にあたる。

平成元年の1月1日にあたるこの朝、作家開高健は新聞紙にでっかい広告をのせた。紙面の3分の1を占める広告、それは年頭の提言、日本人に対する一大提言である。

『あなたの国に、まだトンボは棲めるか』と。

自然は今、全地球規模で酷い状況になっている。

トンボがいなくなった、ドジョウがいなくなった、カエルの鳴き声は聞こえない、ウグイスの声も聞いたことがない…。

トンボやドジョウがのんびりと棲めないところには人間も住みづらいのだということは、いろいろ報告されているが、このことをそのまま皮膚に、ナイフで切られた傷のように感じる人は実に少ない。考えるより感じることのほうがむずかしいのは、万古不易、いつの時代も変わらぬものなのだ。

自然にはある限界点があり、それ以内ならば、人間がほんのちょっと努力すれば蘇るという不屈さをもっているが、その限界点を越えてしまうとどうあがこうと作り出せない。

ヒトは月へ行行って帰ってこられるようになったものの、オタマジャクシ一匹、実験室で作り出せないじゃないか。そのオタマジャクシが失われた時、人間の心にどういふ変化が起こるか、この問題をみんなもっと見つめる必要がある。

形あるものが形のないものから生まれるのだという大原則に鋭く、深く目を凝らしていただきたい。そして山や川を眺めてほしい。

すべての日本人が心の故郷喪失者になりつつある今こそ。切に！

開高 健

（新潟日報・平成元年2月8日掲載・公共広告機構）

『あなたの国に、まだトンボは棲めるか』に、東京の人は、大阪の人は「ノー」と答えるでしょう。

『あなたの島にトンボは棲めますか』

多くの佐渡人は「イエス」と答えるでしょう。

『佐渡にトキが棲めますか』

「ノー」。

『佐渡にユキワリソウの千重咲きがおすすめですか』

「ノー」。

数年前（昭和60年頃）北陸で絶滅されたといわれたユキワリソウの千重咲き（花卉 120枚前後）が発見された。山をなめつくすような掃討マニヤによって千重咲きも八重咲きも、変り花も山野から姿を消すのに3年も必要としなかった。

大佐渡山麓のスギ林内に越後に自生しないコアツモリソウ



ユキワリソウの千重咲きがおすすめですか

（ラン科）の大群生、300～400株をみたのは昭和59年5月。この日のコアツモリソウを忘れられず10日後に同地を訪れたが、「アッと驚くタメゴロウ」。コアツモリソウは1株もない。ちぎれた残骸が散乱し、踏み足跡がおびただしい。

真野湾沿いの沢根・河原田・八幡・四日町・新町とつづく砂浜と砂丘。海岸に車道がとおり、ハマナス・クコの藪やネコノシタ・ハマゴウの海岸低木は昭和40年代後半から姿を消した。

「あなたの町にハマナスはおすすめですか」

「ノー」。

「コアツモリソウがおすすめですか」

「ノー」。

小木岬の溪谷。その北限が能登とされた暖地のシダのコモチシダ、マメツタ、オオバノイノモトソウなどの暖地性シダの宝庫の谷にダム工事が行われるのは平成元年。シダは水没する。

「暖地のシダがおすすめですか」

「ノー」である。

自然が酷い状況になっていくなかで、このことを「ナイフで切られた傷のように感じる人は実に少ない」。それこそ日本人が「心の故郷喪失者になりつつある、いやになっている」と、開高健はウメキ叫ぶ。

昭和はリクルートコスモス疑獄の中で幕を閉じた。金を支配し、人間を支配し、そして自然を支配しようとした昭和は早く閉じればよい。

人間喪失はここまででよい。人間復活が大地を復活させ万物を復活させるとウメキ叫び行動する平成でありたい。

佐渡山草会誌『島の花・7号（1990）掲載』

（佐渡市金井町千種106-3）